

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄							備考	
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	ガクコホクジン トキョウノウキョウガク								
フリガナ大学の名称	トキョウノウキョウガク								
大学本部の位置	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号								
大学の目的	<p>本大学院農学研究科は、農学の諸分野にわたるフロンティアとして、健全で調和のとれた見識と実力を有する研究者及び高度専門技術者の人材育成を目指し、実学主義教育のもと論理的思考力と問題解決能力の獲得向上を図り、生物資源、先端生命、環境科学並びにアグリビジネス分野の教育・研究を行うことを目的とする。</p>								
新設学部等の目的	<p>農学研究科 バイオセラピー学専攻 修士課程</p> <p>平成18年4月、本学では、従来の農学の概念の枠にとどまらない新たな研究領域として、農学と医学、福祉、教育等との境界、複合領域として社会の要望に応える形で、農学部バイオセラピー学科を開設した。</p> <p>この領域は、従来の生産科学や生命科学としての農学を基盤としているが、教育・研究内容はそれらを活用した環境保全、人の生活や健康の向上、心身の不都合の改善、教育への貢献、人類の文化の伝承と創造等の様々な分野への応用を対象としている。</p> <p>本領域を実践する人材を養成するための基盤はバイオセラピー学科の設置によって確立したが、さらに本領域に精通した専門家や研究者を養成するための学的体系や教育組織は未完成である。そこで、当該学科に人間動物関係学、人間植物関係学、生物介在療法学を柱としたバイオセラピー学専攻修士課程を置くことにより、高度な専門性を有する職業人を養成する。</p> <p>本専攻では、当該研究領域に関する新たな価値を創成することを意識し、社会の様々な方面で高度な専門的職業人としてその領域の諸課題の解決や発展に寄与しうる人材の育成を目指す。すなわち、動植物について、探索、分類、評価、栽培、飼育、管理等の基礎的な能力を有し、次の課題の解決に取り組める能力を習得させる。</p> <p>(1) 環境を解析・評価し、環境や希少種の保護・保全、傷ついた環境の修復・再生、環境変動による劣化した環境の向上等を推進するための基礎的研究と実践を行うことができる人材</p> <p>(2) 植物そのものや園芸あるいは伴侶動物と人との関係が有する多様な機能を見いだすとともに、その機構を解明し、人の生活環境の向上や教育等に活用できる人材</p> <p>(3) 生物介在療法学専攻においては関連する資格を有し、当該分野においてより専門性の高い指導的役割を果たす事ができるとともに、生物介在療法を科学的に検証し、社会に普及できる人材</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】農学部バイオセラピー学科
	農学研究科 修士課程 (Graduate School of Agriculture)								
	バイオセラピー学専攻 (Department of Human and Animal-Plant Relationships)	2	10	—	20	修士 (バイオセラピー学)	平成22年4月 第1年次	神奈川県厚木市船子1 737番地	
計			10		20				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>・大学院農学研究科バイオセラピー学専攻修士課程は本届出による設置により収容定員増（入学定員10名、収容定員20名）</p> <p>・平成22年4月 大学院生物産業学研究科アクアバイオ学専攻博士前期課程設置予定（平成21年9月届出予定）</p> <p>・大学院生物産業学研究科アクアバイオ学専攻博士前期課程は届出による設置により収容定員増（入学定員5名、収容定員10名）</p> <p>・平成22年4月 大学院生物産業学研究科生物産業学専攻博士前期課程を課程変更予定（平成21年9月届出予定）</p> <p>・平成22年4月 大学院生物産業学研究科生物産業学専攻博士前期課程は課程変更により廃止予定（入学定員10名、収容定員20名） ※平成22年年度より学生募集停止</p> <p>・平成22年4月 東京農業大学生物産業学部 食品科学科 → 食品香粧学科に名称変更予定（平成21年6月届出済み）</p>								

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	農学研究科 バイオセラピー学専攻	13科目	12科目	4科目	29科目	30単位				
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設	農学研究科 バイオセラピー学専攻		7人 (7)	3人 (3)	0人 (0)	0人 (0)	10人 (10)	0人 (0)	2人 (2)
		計		7 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	2 (2)
	既設	農学研究科	農学専攻 (博士前期課程)	8 (10)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	19 (21)	0 (0)	2 (2)
			畜産学専攻 (博士前期課程)	10 (10)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	10 (10)
			バイオサイエンス専攻 (博士前期課程)	6 (6)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	12 (12)
			農芸化学専攻 (博士前期課程)	7 (8)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	12 (13)	0 (0)	6 (6)
			醸造学専攻 (博士前期課程)	7 (7)	4 (4)	2 (2)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	4 (4)
			食品栄養学専攻 (博士前期課程)	8 (8)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	5 (5)
			林学専攻 (博士前期課程)	8 (8)	5 (5)	3 (3)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	6 (6)
			農業工学専攻 (博士前期課程)	10 (10)	3 (3)	5 (5)	1 (1)	19 (19)	0 (0)	3 (3)
			造園学専攻 (博士前期課程)	8 (8)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	2 (2)
			国際農業開発学専攻 (博士前期課程)	10 (11)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	16 (17)	0 (0)	3 (3)
農業経済学専攻 (博士前期課程)			7 (8)	8 (8)	0 (0)	1 (1)	16 (17)	0 (0)	2 (2)	
国際バイオビジネス学専攻 (博士前期課程)			10 (10)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	6 (6)	
既設分	生物産業学研究科	生物産業学専攻 (博士前期課程)	25 (25)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	32 (32)	0 (0)	0 (0)	
		計	124 (129)	65 (65)	21 (21)	3 (3)	213 (218)	0 (0)	61 (61)	
		合計	131 (136)	68 (68)	21 (21)	3 (3)	223 (228)	0 (0)	63 (63)	
教員以外の職員の概要	職 種		専 任		兼 任		計			
	事務職員		186 (186)	人	27 (27)	人	213 (213)	人		
	技術職員		25 (25)		0 (0)		25 (25)			
	図書館専門職員		8 (8)		8 (8)		16 (16)			
	その他の職員		6 (6)		0 (0)		6 (6)			
計		225 (225)		35 (35)		260 (260)				
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用		計		東京農業大学短期大学部及び東京農業大学第一高等学校(収容定員1,125人、面積基準運動場8,400㎡)、中等部(収容定員375人、面積基準運動場4,950㎡)と共用 借用面積：1,385.58㎡ 借用期限：無 借用面積：3,950.00㎡ 借用期限：無 借用面積：3,570.24㎡ 借用期間：60年		
	校舎敷地	243,592.20㎡	116,180.64㎡	15,350.76㎡		375,123.60㎡				
	運動場用地	30,100.00㎡	33,633.66㎡	6,453.99㎡		70,187.65㎡				
	小 計	273,692.20㎡	149,814.30㎡	21,804.75㎡		445,311.25㎡				
	そ の 他	2,273,339.14㎡	408,673.71㎡	0㎡		2,682,012.85㎡				
合 計		2,547,031.34㎡	558,488.01㎡	21,804.75㎡		3,127,324.10㎡				
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用		計		東京農業大学短期大学部と共用		
		98,723.26㎡ (98,723.26㎡)	63,803.02㎡ (63,803.02㎡)	5,379.08㎡ (5,379.08㎡)		167,905.36㎡ (167,905.36㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設		語学学習施設		大学全体		
	102室	87室	673室	7室 (補助職員 2人)		2室 (補助職員 0人)				

専任教員研究室		新設学部等の名称				室数				
		農学研究科 バイオセラピー学専攻				10室				
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	研究科全体		
	農学研究科	392,343 [115,324] (377,720 [112,786])	5,934 [2,338] (5,934 [2,338])	5,183 [4,532] (5,183 [4,532])	27,456 (27,456)	42,217 (42,217)	33,777 (33,777)	電子ジャーナルは (5,183 [4,532])を大 学全体で共用		
	計	392,343 [115,324] (377,720 [112,786])	5,934 [2,338] (5,934 [2,338])	5,183 [4,532] (5,183 [4,532])	27,456 (27,456)	42,217 (42,217)	33,777 (33,777)			
図書館		面積		閲覧座席数		収納可能冊数				
		6,666.08㎡		1,477		627,472				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		10,371.27㎡		グラウンド、野球場		テニスコート				
経費の 見積り 及び 維持 方法 の 概 要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科全体	
		教員1人当り研究費等		416千円	416千円	—千円	—千円	—千円		—千円
		共同研究費等		60,000千円	60,000千円	—千円	—千円	—千円		—千円
		図書購入費	2,461千円	2,461千円	2,461千円	—千円	—千円	—千円		—千円
	設備購入費	21,363千円	4,220千円	4,220千円	—千円	—千円	—千円	—千円		
学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1,461千円	1,241千円	—千円	—千円	—千円	—千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、寄付金収入、補助金収入等							
既設 大学 等 の 状 況	大学の名称 東京農業大学									
	学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所在地	
	農学部	年	人	年次 人	人		倍		神奈川県厚木市船子 1737番地	
	農学科	4	220	3年次 16	912	学士(農学)	1.21	昭和 24年		
	畜産学科	4	180	3年次 10	740	学士(農学)	1.21	昭和 24年		
	バイオセラピー学科	4	140	3年次 10	580	学士(農学)	1.30	平成 18年		
	応用生物科学部						1.19		東京都世田谷区桜丘 1丁目1番1号	
	バイオサイエンス学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生物 科学)	1.23	平成 10年		
	生物応用化学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生物 科学)	1.25	平成 10年		
	醸造科学科	4	140	3年次 20	600	学士(応用生物 科学)	1.23	平成 10年		
	栄養科学科 食品栄養学専攻	4	80	3年次 8	336	学士(応用生物 科学)	1.13	平成 10年		
	管理栄養士専攻	4	80	3年次 4	328	学士(応用生物 科学)	1.02	平成 10年		
	地域環境科学部						1.27			
	森林総合科学科	4	140	3年次 6	572	学士(地域環境 科学)	1.26	平成 10年		
生産環境工学科	4	140	3年次 3	566	学士(地域環境 科学)	1.24	平成 10年			
造園科学科	4	140	3年次 20	600	学士(地域環境 科学)	1.30	平成 10年			
国際食料情報学部						1.24				
国際農業開発学科	4	140	3年次 10	580	学士(国際食料 情報学)	1.21	平成 10年			

既設大学等の状況	食料環境経済学科	4	220	3年次 10	900	学士(国際食料情報学)	1.23	平成10年		
	国際ハイクエスト初学科	4	170	3年次 5	690	学士(国際食料情報学)	1.27	平成10年		
	生物産業学部								北海道網走市八坂196番地	
	生物生産学科	4	100	3年次 10	420	学士(農学)	1.25	平成元年		
	アグリバイオ学科	4	80	—	320	学士(農学)	1.15	平成18年		
	食品科学科	4	80	3年次 12	344	学士(農学)	1.11	平成元年		
	産業経営学科	4	100	3年次 5	470	学士(経営学)	0.86	平成元年		
	大学の名称	東京農業大学短期大学部								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	短期大学部	年	人	年次人	人		倍		東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号	
	生物生産技術学科	2	130	—	260	短期大学士(生物生産技術学)	1.17	平成4年		
	環境緑地学科	2	70	—	140	短期大学士(環境緑地学)	1.22	平成4年		
	醸造学科	2	80	—	160	短期大学士(醸造学)	1.28	平成4年		
	栄養学科	2	150	—	300	短期大学士(栄養学)	1.11	平成4年		
	大学の名称	東京農業大学大学院								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
農学研究科 博士前期課程						1.17				
農学専攻	2	14	—	28	修士(農学)	1.28	昭和28年	神奈川県厚木市船子1737番地		
畜産学専攻	2	12	—	24	修士(畜産学)	1.12	昭和61年			
バイオエンス専攻	2	30	—	60	修士(バイオエンス)	1.18	平成14年	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号		
農芸化学専攻	2	25	—	50	修士(農芸化学)	1.32	昭和32年			
醸造学専攻	2	12	—	24	修士(醸造学)	2.04	平成2年			
食品栄養学専攻	2	12	—	24	修士(食品栄養学)	0.83	昭和61年			
林学専攻	2	12	—	24	修士(林学)	0.87	昭和61年			
農業工学専攻	2	8	—	16	修士(農業工学)	1.12	平成2年			
造園学専攻	2	12	—	24	修士(造園学)	1.03	平成2年			
国際農業開発学専攻	2	12	—	24	修士(国際農業開発学)	1.16	平成2年			
農業経済学専攻	2	10	—	20	修士(農業経済学)	0.85	昭和28年			
国際ハイクエスト初学専攻	2	12	—	24	修士(国際ハイクエスト初学)	0.99	平成14年			
農学研究科 博士後期課程						0.68		神奈川県厚木市船子1737番地		

平成20年4月から入学定員を次のとおり変更
産業経営学科
130→100(△30)

既設大学等の状況	農学専攻	3	5	—	15	博士(農学)	0.26	昭和37年	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号	
	畜産学専攻	3	4	—	12	博士(畜産学)	0.41	平成2年		
	バイオサイエンス専攻	3	6	—	18	博士(バイオサイエンス)	0.49	平成16年		
	農芸化学専攻	3	5	—	15	博士(農芸化学)	0.53	昭和34年		
	醸造学専攻	3	2	—	6	博士(醸造学)	0.16	平成14年		
	食品栄養学専攻	3	2	—	6	博士(食品栄養学)	0.83	平成14年		
	林学専攻	3	4	—	12	博士(林学)	0.41	平成2年		
	農業工学専攻	3	2	—	6	博士(農業工学)	0.66	平成14年		
	造園学専攻	3	3	—	9	博士(造園学)	0.55	平成14年		
	国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士(国際農業開発学)	1.16	平成14年		
	農業経済学専攻	3	5	—	15	博士(農業経済学)	1.06	昭和37年		
	国際バイオサイエンス専攻	3	5	—	15	博士(国際バイオサイエンス)	1.13	平成16年		
	環境共生学専攻	3	5	—	15	博士(環境共生学)	1.13	平成2年		
	生物産業学研究科 博士前期課程 生物産業学専攻	2	15	—	30	修士(生物産業学又は経営学)	0.86	平成5年		北海道網走市八坂196番地
	生物産業学研究科 博士後期課程 生物産業学専攻	3	8	—	24	博士(生物産業学又は経営学)	0.41	平成7年		
大学の名称	東京情報大学									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
総合情報学部	年	人	年次人	人		倍		千葉県千葉市若葉区谷当町1200番地2		
情報システム学科	4	135	3年次7	554	学士(総合情報学)	1.21	平成13年			
環境情報学科	4	120	3年次9	498	学士(総合情報学)	0.97	平成13年			
情報ビジネス学科	4	114	3年次11	478	学士(総合情報学)	1.00	平成17年			
情報文化学科	4	135	—	540	学士(総合情報学)	1.05	平成8年			
大学の名称	東京情報大学大学院									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
総合情報学研究科 博士前期課程 総合情報学専攻	2	15	—	30	修士(総合情報学)	1.33	平成17年	千葉県千葉市若葉区谷当町1200番地2		
総合情報学研究科 博士後期課程 総合情報学専攻	3	3	—	9	博士(総合情報学)	0.77	平成17年			

	名称 (所在地)	目的 (規模等)	設置年月
附属施設の概要	1 世田谷学術情報センター・図書館 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学生の学習・研究活動の支援施設	昭和43年3月
	厚木学生サビセンター 学術情報センター(図書館) (神奈川県厚木市船子1737)	学生の学習・研究活動の支援施設	平成10年4月
	ホーク学生サビセンター 学術情報センター(図書館) (北海道網走市八坂196)	学生の学習・研究活動の支援施設	平成元年4月
	2 農学部附属施設		
	農学研究所 (神奈川県厚木市船子1737)	農業・園芸・畜産・動植物に関する研究	平成10年4月
	食品加工技術センター (神奈川県厚木市船子1737)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成16年4月
	厚木農場 (神奈川県厚木市船子1737 他)	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習 (224,082.11㎡)	
	富士農場 (静岡県富士宮市麓422)	畜産実習を中心とした実習教育 (323,260.00㎡)	昭和17年
	植物園 (神奈川県厚木市船子1737)	有用植物の収集・保存・展示	
	バイオセラピーセンター (神奈川県厚木市船子1737)	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究	平成19年4月
	3 応用生物科学部附属施設		
	応用生物科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学科共通分野の総合的な研究機関	平成10年4月
	食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成10年4月
	アイソトープセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	動植物・微生物のトレーサー実験等	平成10年4月
	バイオテクノロジーセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	バイオプログラムの円滑な推進を目的	平成10年4月
	菌株保存室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	研究・応用利用に関する微生物の保存・管理	平成10年4月
	4 地域環境科学部附属施設		
	地域環境研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部の横断的・総合的な研究	平成10年4月
	奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137)	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等 (653,016.00㎡)	昭和53年
	生物環境調節室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	植物の育成・生理環境に関する研究	平成10年4月
	電子顕微鏡室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	目的物の微細構造の解析を目的とする	平成10年4月
	5 国際食料情報学部附属施設		
	国際食料情報研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部共通の課題の総合的な研究	平成10年4月
	宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2)	熱帯農業の実習教育・試験研究 (98,262.00㎡)	昭和63年
	6 生物産業学部附属施設		
	生物資源開発研究所 (北海道網走市八坂196)	地域に根ざした生物産業・資源の研究	平成18年2月
	食品加工技術センター (北海道網走市八坂196)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成16年4月
	網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8)	寒冷地大規模農場の実習教育 (432,174.00㎡)	昭和57年
	臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究 (4,656.60㎡)	平成18年4月
	7 総合研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践を目的とする	平成12年4月
8 国際協力センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力連携	平成18年4月	
9 コンピュータセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	情報処理に関する教育、研究	平成10年4月	

設置の趣旨等を記載した書類
(東京農業大学大学院農学研究科バイオセラピー学専攻)

大学院農学研究科設置の理念と背景

農学はこれまで食料生産をはじめとする生物関連産業の振興、農村地域社会の発展及び地球生態環境の保全を通して、生産者のみならず、広く人類の福祉の向上に貢献すること等を使命としてきた。これまでの農学は、物質科学、生命科学や人文科学等との多様な関わりにより、これらの学術の発展にも貢献してきたが、これからの農学には、専門化した科学知の領域を越えて、地球規模での困難な課題を解決するための新たな知的創造活動を展開し、新たな知の体系化を図ることが求められている(日本学術会議生産農学委員会農学教育分科会)。

本学は建学の精神である実学をもって、これらの課題解決に貢献するため、大学昇格時より旧学位令に基づいて多くの人材に農学博士の学位を授与してきた。新制大学移行後の昭和28年には農学研究科を設置して以来発展に努め、現在、2研究科に博士課程15専攻、修士課程14専攻を設け大学院における教育研究に精進し、それらの成果を農業及び関連産業に還元しながら斯界の発展に寄与してきた。

農学の進歩は、農業の発展を通じ食料や生物資源の持続的な再生産、人間の生命・生活の維持・発展、新たな生物産業の開発・展開、生物多様性や生態系の維持・管理、地球規模の生態環境の保全・改善などに貢献してきた。しかしながら、地球環境の変化は人類の予想をはるかに超える形とスピードで進行し、年毎に絶滅種が増加して生物多様性の低下が懸念されている。また、人々は多くのストレスを抱え、身近な生活の中に様々な癒しを求めている。このような状況の中で、人と動植物の共存する健全な自然環境の実現、生活の質の向上にかかる動植物の積極的な活用が認識され、これらへの取り組みが強く求められている。このことから、本学は「生産科学」として従来の農学が培ってきた技術や知識を活用し、これらの問題や要望に応える形で農学部の中にバイオセラピー学科を新設するに至った。

農学領域では、人間の生活様式の変化にともない従来の農学の概念の枠にとどまらない新たな研究領域の創成が求められており、バイオセラピー学科は、農学と医学、福祉、教育等との境界、複合領域として社会の要望に応える形で誕生した。この領域は、従来の生産科学や生命科学としての農学を基盤としているが、教育・研究内容はそれらを活用した環境保全、人の生活や健康の向上、心身の不都合の改善、教育への貢献、人類の文化の伝承と創造等の様々な分野への応用を対象としている。前述のごとく本領域を実践する人材を養成するための基盤は、バイオセラピー学科の設置によって確立したが、さらに本領域に精通した専門家や研究者を養成するための学的体系や教育組織は未完成である。そこで、バイオセラピー学科に修士課程を置くことにより、高度な専門性を有する職業人及び基盤となる学理の確立に貢献できる研究者を養成する教育研究活動が可能になると考える。

ア. 設置の趣旨及び必要性

(設置趣旨)

農学部は、東京農業大学が掲げる『食料・環境・健康・資源エネルギー』の理念に基づき、農用動植物の「生産科学」、すなわち主として食料生産に関する研究・教育並びに人材養成を担ってきた。これらに加え、絶滅種や絶滅危惧種が年を追う毎に増加し、生物資源は多様性を失い枯渇が懸念される情勢を受け止め、生物資源の持続的確保、動植物を活用した市民の健康増進、子どもの教育への寄与、高齢者の生きがいや健康づくり、生活の質(QOL)の向上、さらに心理的、福祉的・医療的支援を必要とする人たちに生物を介在させた療法を実践できる人材の育成を目指す新たな学科、すなわち「生活科学」として生物との共生を追究するバイオセラピー学科を2006年4月に開設した。

バイオセラピー学科は、これらの設置理念に基づき、3分野6研究室すなわち<動物共生分野>として、野生動物とその生息環境の保全と利活用を追究する「野生動物学研究室」及び人と動物とのより良い共生関係を追究する「伴侶動物学研究室」、<植物共生学分野>として人間と植物との共利共生を目指し、植物自然環境の保全、再生及び向上を追究する「植物共生学研究室」及び園芸による暮らし、社会、環境の質の向上を追究する「人間植物関係学研究室」、並びに<生物介在療法分野>として植物の医療・福祉的活用を追求する「園芸療法学研究室」及び動物の教育・医療・福祉的活用の理論と方法を追究する「動物介在療法学研究室」を設置している。学部卒業後は習得した知識や技術を生かし、関連する施設、団体、企業等において農学の新たな分野を実践することを通じて社会に貢献できる人材の養成を目指してきた。

しかしながら、本分野は現代社会が求める新しい領域であり、広範囲な知識と実際的な技術を基盤とした先駆的で開発的な能力を必要とすることから、社会において指導的な役割を果たす人材を育成するためには学部4年間に加え、大学院課程での継続した教育を欠かすことができない。このことから、第1期学部生卒業時にあわせ、平成22年度に大学院修士課程を設置したい。

(設置の必要性と扱う内容)

人間生活と係わる動物や植物が、情操教育、文化の伝承及び人と人とを結びつけるコミュニケーションの媒体として、また、環境問題への関心を高める契機となるなど、家庭や地域社会の生活の円滑化に寄与している。他方、動植物の豊かな里山が健康の源泉となり、野生動物や伴侶動物さらに植物が私たちに癒しや活力を与え、豊かな人間性の醸成に寄与してくれる。さらに、動植物を育てた経験をもつ人間の個性はより豊かとなる。こうした事実を踏まえて、病院や医療機関、福祉施設などで、動物介在療法(アニマル・アシステッド・セラピー)や植物介在療法(プラント・アシステッド・セラピー)による心理的ケアや運動機能改善の可能性が注目され試行されている。また、まちづくりや市民の健康増進、人と動物との関係を学校教育、高齢者の生きがいや健康づくりに、農耕・園芸活動を

重点施策として積極的に取り入れる自治体も増えてきている。

近年、地球規模の環境問題の深刻化にともない、種の多様性や健全な自然環境の保全が求められており、環境影響評価や環境向上、絶滅危惧種の保全に携わる人材に加え、より高度な知識や技術を持った技術者や研究者が必要とされている。このような専門性が要求される職業には、環境の調査や保全に直接的に関与する職種に加え、動植物の管理に関わる、教育、行政、国内外の NGO、NPO 等多くの業種がある。一方、我が国で飼育される家庭動物の数は 2003 年に 1,900 万頭と 15 歳以下の子供の人口を上回り、このことに裏打ちされた関連産業は、1 兆円規模の産業にまで到達しており、さらに飼育に関わるものだけでなく、住宅産業や旅行産業にまで及びつつある。また、植物や園芸の癒しや安らぎ、心身を健康にする機能を生活の中に取り入れることは古くから行われているが、近年、植物の機能を自然環境の修復や心理、医療、教育に積極活用することが注目されており、これらの分野では、植物や園芸に関する知識だけでなく、人に対して適切な対応ができ、生き物の成長を支援できる人材が求められている。

以上のような新しい領域を、実践し効果を検証、応用し社会に広めうる人材を養成する仕組みは、本専攻が初めて構築しようとするものである。本大学院修士課程では、社会の様々な方面において高度の専門的職業人として、本領域に関する新たな価値を創成することを意識し、本領域の諸課題の解決や発展に寄与しうる人材の育成を目指す。すなわち、動植物について、探索、分類、評価、栽培、飼育、管理等の基礎的な能力を有し、次の課題の解決に取り組める人材の養成を目指す。①環境を解析・評価し、環境や希少種の保護・保全、傷ついた環境の修復・再生、環境変動による劣化した環境の向上等を推進するための基礎的研究と実践を行うことができる人材、②植物そのものや園芸あるいは伴侶動物と人との関係が有する多様な機能を見いだすとともに、その機構を解明し、人の生活環境の向上や教育等に活用できる人材、③生物介在療法学専修においては関連する資格を有し、当該分野においてより専門性の高い指導的役割を果たす事ができるとともに、生物介在療法を科学的に検証し、社会に普及出来る人材。

イ. 修士課程までの構想か、又は、博士課程の設置をめざした構想か

本専攻を構成する学問領域は、環境問題への対応や生物資源の持続的確保等、農学の既存の学問体系を基盤にし、近年、社会的なニーズが高まり農学の新たな領域として学問基盤の充実が求められている、心理、教育、医療福祉の現場での応用可能な学際領域までの多岐にわたっている。これらの領域を新たにバイオセラピー学として体系的に確立し、学問分野を創成していくためには、科学的な知見の蓄積が不可欠である。そのためには、本領域を専門に研究、発展させていく研究者の養成が不可欠であることから、今回の修士課程設置は、これに続く博士課程の設置を展望した上での構想である。

ウ. 研究科、専攻等の名称及び学位の名称

農学研究科バイオセラピー学専攻は、人と動植物とのより良い関係を、環境レベル、生活レベル及び療法レベルから追究し、人の生活の質を向上させることを目指す農学部バイオセラピー学科の教育研究を基盤とするさらに高度な教育を展開するため、「野生動物学研究室」と「伴侶動物学研究室」からなる<人間動物関係学専修>、「植物共生学研究室」と「人間植物関係学研究室」からなる<人間植物関係学専修>、及び「植物介在療法学研究室」と「動物介在療法学研究室」からなる<生物介在療法学専修>の3専修を設置しようとするものである。これらの専修の構成は、学部の研究室と教育研究分野の関係と同じであり、教育・研究内容は学部の教育課程を基に発展させたものであることから、授与する学位は修士（バイオセラピー学）とする。なお、英語専攻名は、Department of Human and Animal-Plant Relationships とする。

エ. 教育課程編成の考え方及び特色

本専攻の目指す新たな学問領域は、環境問題への対処、心身並びに社会の健康維持・増進、生活の質の向上、生物資源の持続的確保等、現代社会が求めている諸課題へ対応しようとするものである。しかしながら、この領域の人材を本格的に養成するプログラムは未発達で、この領域を科学として追究し、人材養成を図る教育・研究組織の構築は、本領域において先行する先進諸外国に比べ著しく遅れている。これらの点に対応しうる人材を継続的に養成し、環境、資源、農業、教育、生活、福祉、健康、療法等の関連する産業に新たな可能性を構築し発展させることは、先駆的な学科開設を行った本学の社会的責任である。これらのことから、大学院修士課程では学部での専門分野を基盤とするさらに高度な教育を展開し、研究機関、教育施設等で本領域の専門家として関連する課題の解決やそのよりよき活用を目指して、指導的な役割を担う人材及び本領域の学理を追究し学問体系の構築に寄与する研究者の養成を目的とする大学院修士課程の設置が必要である。これを実現するため、「野生動物学研究室」と「伴侶動物学研究室」からなる<人間動物関係学専修>、「植物共生学研究室」と「人間植物関係学研究室」からなる<人間植物関係学専修>及び「植物介在療法学研究室」と「動物介在療法学研究室」からなる<生物介在療法学専修>の3専修を柱とした教育・研究を行い、社会が求める本領域の中核的人材の養成と研究成果の還元を行いたいと考える。

バイオセラピー学科の研究室は、人と生物との関係を、基盤となる自然環境、それを踏まえての日常生活、さらに進化させた療法的関わり、の3段階に分け、用いる教育研究手段や対象を動物と植物に分類した6研究室から構成されている。学科の教育方針は動植物の区別無くすべての階層について基礎的な理解を持つことを基本理念としており、各研究室での専門的な教育は3年次以降に行っている。本修士課程では、各研究室における教育研究を基礎とし、さらに高度な教育研究を行っていく。すなわち、3専修に3特論を配置し、人と動物の共生、人と植物の共生及び動植物を介在した療法に関する教育を行う。すなわち、人間動物関係学専修においては、「人間動物関係学特論(一)、(二)」を配置し、人

間と動物との関わりを、遺伝子、生理、生態、行動、環境レベルまで広く展開し、次のステップとして野生動物学詳論や伴侶動物学詳論を配し、野生動物や伴侶動物の保護・保全から活用についての教育を行う。人間植物関係学専修においては「人間植物関係学特論(一)、(二)」を配置し、人間と植物の関わりについて、環境レベルから生活レベルにわたり、植物の保護・保全及び活用についての教育を行う。さらに、次のステップとして、植物共生学詳論と、人間植物関係学詳論を配し、より詳細な内容の講義を展開する。生物介在療法専修においては、「生物介在療法学特論」を配置し、動物並びに植物を介在した療法に関わるメカニズムから手法や効果の検証等についての教育を行い、さらに、次のステップとして、「動物介在療法学詳論」と「植物介在療法学詳論」を配置する。また、生物介在療法専修においては、生物介在療法特別実習(一)、(二)を配し、療法の場でのより高度な実務を体験させる。

上記各特論及び詳論の履修、並びにバイオセラピー学特別実験・実習・演習により修士論文作成のための研究を行う他、研究成果等の発表を通じてプレゼンテーション力を養うための「プレゼンテーション」を設け、準備段階から発表までのプロセスを1回1単位として4回まで単位化する。専門家あるいは研究者として必要な文章力を養うことを目的に、研究成果をとりまとめて学術雑誌に投稿し、審査を経て論文として受理されるまでの過程を経験することを単位化する「論文作成」を2単位ずつ4回まで単位化する。また、この4回のうち2回は英語能力を基礎とした国際的な情報発信力の涵養を重視して英語の論文を対象とする。さらに、専門分野における最先端の話題を学ぶ「特別講義」、教育力や指導力を養うための「総合実践演習」等の科目を配置する(資料1、2)。

オ. 教員組織の編成の考え方及び特色

本専攻は、人間動物関係学、人間植物関係学及び生物介在療法学の3つの専修に3つの特論を配置する。各専修は、それぞれ植物共生学研究室と人間植物関係学研究室、野生動物学研究室と伴侶動物学研究室及び園芸療法学研究室と動物介在療法学研究室内の6研究室から構成されている(資料3)。このうち、生物介在療法学専修は、動物系と植物系の研究室から構成されていることから、動物系と植物系の指導教授を各1名配置する。各専修は学部の分野と共通であることから、授業担当者は各研究室の教員が関連科目を担当する。

カ. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件(資料6)

大学院生は入学試験の際、希望する研究内容から指導教授を選び、その研究室の専門科目を入学試験の必須科目とする。また、口頭試問において志望動機等についての質問を受け、合否を決定することから、入学時には所属する研究室が決定している。本専攻は、3つの特論にそれぞれ指導教授を配置し、合計5名の指導教授で構成されており(資料3)、所属する専修の指導教授から履修・研究についての指導を受ける。履修は所属する専修の特論および特論演習を必修とし、指導教授の指導の下本人の希望する他の履修科目を定め

る。他の分野や他専攻の科目を履修することもできるが、所属専修の関連科目を主体とした履修により修了要件の30単位を満たすことができることから、高い専門性を修得するための履修が可能となる。修士課程修了の要件は、大学院に2年以上在学し、30単位以上を習得しかつ必要な研究指導を指導教授から受けたうえ、研究科委員会の行う修士論文の審査及び試験に合格することとする。

(1) 履修指導

専門分野における研究遂行能力は、バイオセラピー学特別実験・実習・演習による修士論文作成時に、指導教授の指導により設定された研究課題の研究を通じて養成する。専門的知識は、各専修の必修科目である特論と各研究室単位で担当する詳論等の講義により深める。専門的な技術や手法についてもバイオセラピー学特別実験・実習・演習における実験や演習を通じて修得する。また、総合実践演習におけるTAやRAとしての経験を通じて指導者や教育者としての資質を養う。生物介在療法専修においては、生物介在療法特別実習(一)及び生物介在療法特別実習(二)において実際の療法や教育の場で求められる能力を涵養する。

(2) 研究指導

修士論文の研究指導は、各研究室が複数の教員による指導体制をとっていることから、指導教授1名に副たる教員として、准教授又は助教を加えることができるとし、複数の教員による研究指導体制を採用できるようにする。バイオセラピー学特別実験・実習・演習により指導教授の指導により、修士論文のテーマの決定から論文作成までを行う。この間、各研究室単位で研究計画の発表、中間発表等を実施する。また、共通科目のプレゼンテーション(一)、(二)、論文作成法および英語論文作成法等により、指導教授の指導下で実際に学会発表や論文の投稿を行い、研究者としての成果の発表能力を養う。

キ. 特定の課題についての研究成果の審査を行う場合

該当しない。

ク. 施設・設備等の整備計画

本専攻では、既存の農学や畜産学専攻に在籍する大学院生を擁する研究室では、既に大学院生用の部屋を確保し、机や書庫、パーソナルコンピューター等の自習環境を整備しており、また、実験器具、設備や圃場等も流用できる。他の研究室においても修士課程の収容予定人員を想定して整備を行っている。従って、指導教員は大学院生に対して日常的に密接な研究指導と論文指導が可能である。このような環境により、情報の収集、大学院生間の情報の交換、討論を容易に行うことができ、活発な研究活動が可能となる。また、専攻内で共通の実験・演習室、プレゼンテーション用の設備を整備しており、他の専攻の学生を含めた自主的な勉強会や討論の場として活用できる。また、バイオセラピー学科と共通の生物共生効果測定室が設置されており、人間や動物の生理状態を分析するための機器

が整備されている。また、農学部にはバイオセラピーセンターが設置されており、実践的な教育研究の場が提供されている。

ケ. 既設の学部との関係

農学部は農学科、畜産学科及びバイオセラピー学科の3学科から構成され、農学科及び畜産学科には博士前期・後期課程が設けられている。

バイオセラピー学科は、生産科学あるいは生命科学としての農学を基盤とし、設置の趣旨（ア）で既に述べたような新しい「生活科学」としての人と動植物との関係を追究することにより、環境や人の生活の質の向上を目指す学科である。人と動植物との関わりを追究するため、植物共生分野と動物共生分野を、さらに療法的関わりを追究するため生物介在療法分野の計3分野を設置している(資料4)。バイオセラピー学専攻は、同分野の構成を継承した人間植物関係学専修、人間動物関係学専修及び生物介在療法学専修の3専修で構成され、バイオセラピー学科の当該分野より進学することが主たるコースであるが、無論他分野からの進学も可能であり、農学部の他学科、さらに他学部からの進学が可能である。動物系及び植物系の研究室を配置していること、学際的な教育研究を求めていることから、他分野あるいは他専攻の授業科目も履修できるように措置し、多くの領域にまたがる応用科学としての教育研究の基盤の充実に努めている。

コ. 入学者選抜の概要

主たる進学コースとなるバイオセラピー学科は、定員140名に対し、平成18年度の開設以来、入学志願者数は、平成18年度が2,908人、平成19年度が1,534人、平成20年度が1,694人と高い水準を保っており、全学でも高い競争率となっている。また社会人入試や他大学卒業後の編入学希望者も多い。平成20年7月時点でバイオセラピー学科I期生である3年次生に対し調査を行ったところ、各研究室1～10人の学生が本専攻への進学を希望している。

入学者の選抜は、専門科目2科目（うち1科目は志望研究室の専門科目）、英語（留学生においては日本語）、口頭試問の4科目によって行う。(資料6)。定員はI期試験を9名、II期試験を1名とし、I期試験の定員のうち3名を推薦入試の定員とする。

サ. 教職大学院において取得できる教員免許状について

該当しない。

シ. 大学院設置基準第2条の2又は第14条による教育方法を実施する場合

該当しない

ス. 2つ以上の校地において教育を行う場合

該当しない

セ. 社会人を対象とした大学院教育の一部を本校以外の場所（サテライトキャンパス）で実施する場合

該当しない。

ソ. 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合

該当しない。

タ. 通信教育を行う課程を設ける場合

該当しない。

チ. 管理運営

専攻には管理運営を統括する専攻主任を置く。また、専攻主任の業務を補佐する専攻主事を置く。専攻主任は、専任の指導教授がその任にあたり、専攻主事は専任の指導教授または授業担当者がその任にあたる。専攻の運営は、指導教授及び授業担当者からなる専攻内会議の合議により行うが、人事及び予算に関わる事項は指導教授からなる専攻内委員会により決定する。農学研究科における審議事項は、農学研究科の専攻主任からなる小委員会に提案し、本委員会の審議を経て決定する。

ツ. 自己点検・評価

東京農業大学は、大学(学則第2条の2)、大学院（学則第2条の2）、短期大学部（学則第2条の2）の各学則に「教育研究水準の向上を図り、その目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動の状況について自ら点検評価を行うことに努めること」及び「自己点検評価委員会を置くこと」を規定し、全学自己点検評価委員会を設置している。この規定に基づき、1994年から全学的に自己点検評価を5年おきに実施、点検評価の翌年に自己点検・評価の結果を『東京農業大学の現状と課題』として公表している。また、第三者による客観的 point 検・評価として、学部ごとに学外識者による外部評価を実施し、公表している。

テ. 情報の提供

専攻の理念・目的、カリキュラム、シラバス、学則等各種規定、専任教授のプロフィール・研究成果・教育活動、大学院の基本的な情報（定員、学生数、教員等）、自己点検評価等については大学のホームページ上で公開している。

ト. 教員の資質の維持向上の方策

全学的な取り組みとして、学生による授業評価を行っており、FD（Faculty Development）活動を通じて教員の意識改革や啓発を行っている。また、学術研究・調査、学術の国際交流、職員の教育研究、資質の向上等を目的として、海外を含む校外に一定期間（長期で6ヶ月以上1年未満、短期で3ヶ月以上6ヶ月未満）派遣される留学制度がある。

資料1.

バイオセラピー学専攻カリキュラム

	科目	単位数	
柱科目	選必	人間動物関係学特論(一)	2
	選必	人間動物関係学特論演習(一)	2
	選必	人間動物関係学特論(二)	2
	選必	人間動物関係学特論演習(二)	2
	選必	人間植物関係学特論(一)	2
	選必	人間植物関係学特論演習(一)	2
	選必	人間植物関係学特論(二)	2
	選必	人間植物関係学特論演習(二)	2
	選必	生物介在療法学特論(一)	2
	選必	生物介在療法学特論演習(一)	2
	選必	生物介在療法学特論(二)	2
	選必	生物介在療法学特論演習(二)	2
	小計	24	
選択科目	選択	野生動物学詳論	2
	選択	伴侶動物学詳論	2
	選択	動物介在療法学詳論	2
	選択	植物共生学詳論	2
	選択	人間植物関係学詳論	2
	選択	植物介在療法学詳論	2
	選択	生物介在療法特別実習(一)	2
	選択	生物介在療法特別実習(二)	2
	小計	16	
共通科目	選択	プレゼンテーション(一)	2
	選択	プレゼンテーション(二)	2
	選択	論文作成法	2
	選択	英語論文作成法	2
	選択	特別講義	1
	選択	総合実践演習	1
	小計	10	
研究科共通科目	選択	インターンシップ	2
	選択	知的財産管理法	2
	小計	4	
	必修	バイオセラピー学特別実験・実習・演習	10
	合計	64	

(資料 2)

教育課程関係図 (学部・修士課程)

農学部
バイオセラピー学科
授業科目の名称

学部共通科目	◎フレッシュマンセミナー	
	◎英語	
	農学原論	
	生命倫理	
	環境科学	
	現代社会と人間	
	ボランティア論 他	
	◎バイオセラピー概論	
	◎生物学実験	
	化学実験	
学科共通基礎科目	生物資源学	
	生物保全学	
	生物統計学	
	植物生理・生態学	
	家畜生理・生体機構学	
	動物遺伝学	
	生物活用レクリエーション論	
	健康福祉概論	
	人の心理と生理(一)	
	人の心理と生理(二)	
	危機管理・救急措置	
	組織マネジメント論	
	生物環境関係法規	
	動植物園論	
	自然再生技術論	
	地球環境政策論	
	◎農業実習(一)	
	◎農業実習(二)	
	動物共生分野	野生動物学
		伴侶動物学
野生動物生態学		
動物形態・分類学		
伴侶動物ブリーディング論		
家畜管理学		
家畜行動心理学		
家畜栄養学		
植物共生分野	植物共生学	
	人間植物関係学	
	植物育成管理論	
	植物形態・分類学	
	社会園芸学	
	都市園芸学	
	草花の育て方	
	野菜の育て方	
果樹の育て方		
ハーブの育て方		
生物介在療法学分野	園芸療法(一)	
	園芸療法(二)	
	園芸植物活用法	
	療法の場の設計と施工	
	アニマルセラピー(一)	
	アニマルセラピー(二)	
	動物による心理教育	
	バイオセラピー評価論	
	看護・介護概論	
	人体の科学	
総合化の科目	◎分野別実験・実習(一)	
	◎分野別実験・実習(二)	
	◎分野別実験・実習(三)	
	◎分野別演習(一)	
	◎分野別演習(二)	
	◎分野別演習(三)	
	◎分野別演習(四)	
	インターンシップ	
	◎卒業論文	

農学研究科
バイオセラピー学専攻修士課程

授業科目の名称	
人間動物関係学専修	人間動物関係学特論(一) 野生動物学詳論
	人間動物関係学特論演習(一) 伴侶動物学詳論
	人間動物関係学特論(二)
	人間動物関係学特論演習(二)
人間植物関係学専修	人間植物関係学特論(一) 植物共生学詳論
	人間植物関係学特論演習(一) 人間植物関係学詳論
	人間植物関係学特論(二)
	人間植物関係学特論演習(二)
生物介在療法学専修	生物介在療法学特論(一) 動物介在療法学詳論
	生物介在療法学特論演習(一) 植物介在療法学詳論
	生物介在療法学特論(二) 生物介在療法特別実習(一)
	生物介在療法学特論演習(二) 生物介在療法特別実習(二)
共通科目	プレゼンテーション(一)
	プレゼンテーション(二)
	論文作成法
	英語論文作成法
	特別講義
総合科目	総合実践演習
	バイオセラピー学特別実験・実習・演習

資料3

教育・研究体制

バイオセラピー学専攻教育・研究体制

専修	構成研究室	指導教授		授業担当者
人間動物関係学	野生動物学 伴侶動物学	専任教授	嘱託教授	専任教授*
人間植物関係学	植物共生学 人間植物関係学	嘱託教授**		専任准教授(3)
生物介在療法学	植物介在療法学 動物介在療法学	専任教授	嘱託教授**	専任教授

* 内部昇格予定者

**新規採用予定者

()内は人数

資料 4

既存の学部との関係

バイオセラピー学科とバイオセラピー学専攻の関係

農学部 バイオセラピー学科	研究室	農学研究科 バイオセラピー学専攻修士課程
動物共生分野	野生動物学研究室	人間動物関係学専修
	伴侶動物学研究室	
植物共生分野	植物共生学研究室	人間植物関係学専修
	人間植物関係学研究室	
生物介在療法分野	植物介在療法学研究室	生物介在療法学専修
	動物介在療法学研究室	

資料 5

教育指導体制

バイオセラピー学専攻授業担当者				
	科目		授業担当者	
柱科目	選必	人間動物関係学特論(一)	小川 博	安藤元一 秋篠宮文仁**
	選必	人間動物関係学特論演習(一)	小川 博	安藤元一
	選必	人間動物関係学特論(二)	大石孝雄	
	選必	人間動物関係学特論演習(二)	大石孝雄	
	選必	人間植物関係学特論(一)	山口裕文*	廣瀬友二 宮本 太
	選必	人間植物関係学特論演習(一)	山口裕文*	廣瀬友二 宮本 太
	選必	人間植物関係学特論(二)	山口裕文*	木村正典
	選必	人間植物関係学特論演習(二)	山口裕文*	木村正典
	選必	生物介在療法学特論(一)	林 良博*	滝坂信一
	選必	生物介在療法学特論演習(一)	林 良博*	滝坂信一
	選必	生物介在療法学特論(二)	浅野房世	
	選必	生物介在療法学特論演習(二)	浅野房世	
選択科目	選択	野生動物学詳論	小川 博	安藤元一
	選択	伴侶動物学詳論	大石孝雄	
	選択	動物介在療法学詳論	林 良博	滝坂信一
	選択	植物共生学詳論	廣瀬友二	宮本 太
	選択	人間植物関係学詳論	山口裕文	木村正典
	選択	植物介在療法学詳論	浅野房世	
	選択	生物介在療法特別実習(一)	林 良博	滝坂信一 浅野房世
	選択	生物介在療法特別実習(二)	浅野房世	林 良博 滝坂信一
共通科目	選択	プレゼンテーション(一)		
	選択	プレゼンテーション(二)		
	選択	論文作成法	小川 博	大石孝雄 林 良博*
	選択	英語論文作成法	山口裕文*	浅野房世
	選択	特別講義		
	選択	総合実践演習		
必修	バイオセラピー学 特別実験・実習・演習	小川 博 大石孝雄 林 良博* 山口裕文* 浅野房世		

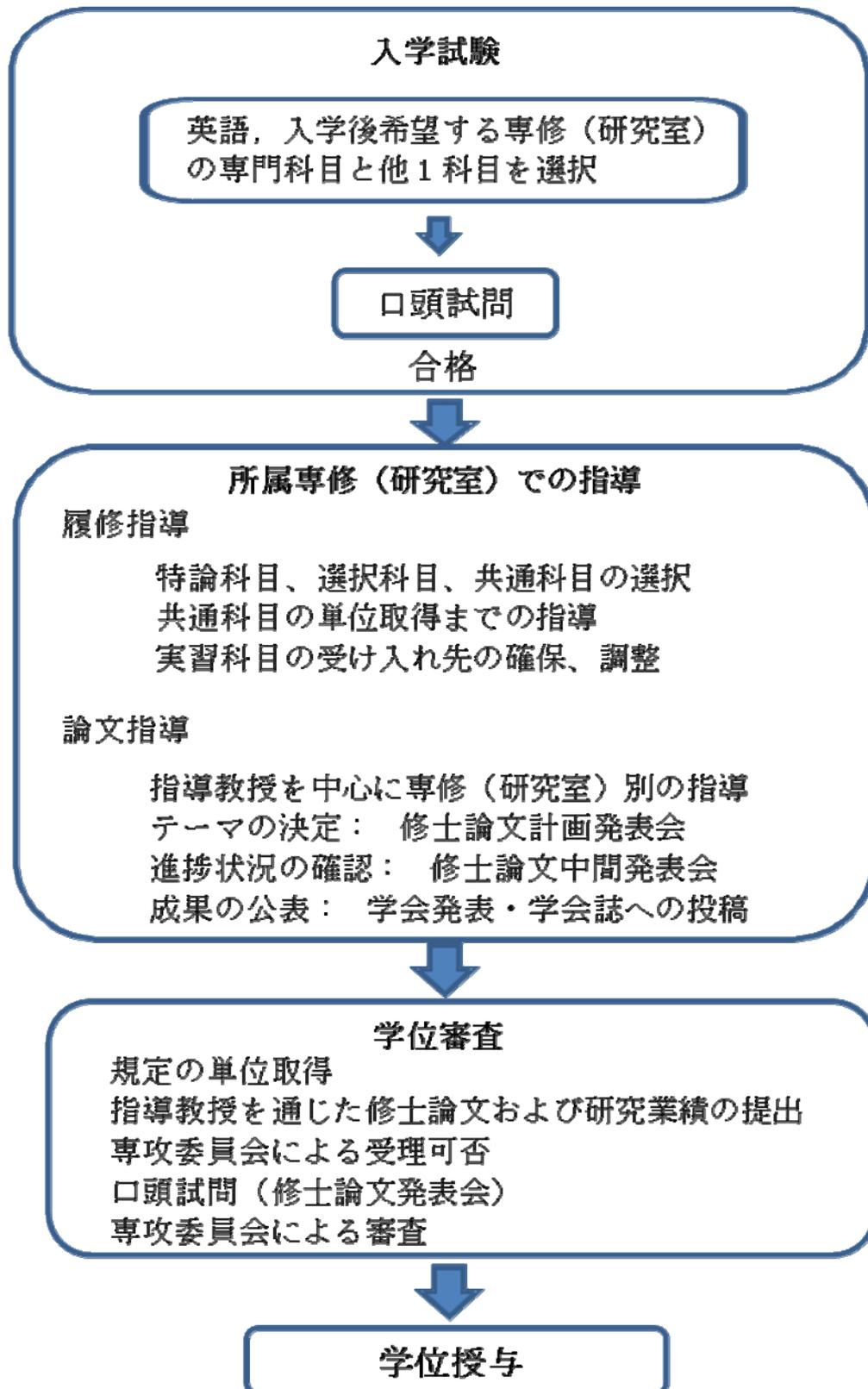
*新規採用予定者

**非常勤講師

バイオセラピー学専攻教育研究体制

専修	構成研究室	指導教授	授業担当者	
人間動物関係学	野生動物学	小川 博	安藤元一	
	伴侶動物学	大石 孝雄		
人間植物関係学	植物共生学	山口裕文*	宮本 太	廣瀬友二
	人間植物関係学		木村正典	
生物介在療法学	園芸療法学	浅野房世		
	動物介在療法学	林 良博*	滝坂信一	

*新規採用予定者



バイオセラピー学専攻カリキュラム各科目の内容

授業科目	必/選	単位	担当教員	講義内容
人間動物関係学特論(一)	選択必修	2	小川 博 安藤元一 秋篠宮文仁*	すべての家畜は、人間が野生動物との継続的な共生関係の結果生み出したものであり、野生動物の家畜化の過程には人間の文化的な背景が密接に関係している。また、野生動物は人にとって重要な資源であるだけでなく、環境を共有する存在でもあり、家畜や伴侶動物などにおいて、様々な局面で人との関わりが生じている。本科目では、人間動物関係学特論(一)において講義する内容について概説後、生き物と人との様々な関係について、歴史的、文化的、農学(バイオセラピー学)的な視点から講義を展開する。
人間動物関係学特論演習(一)	選択必修	2	小川 博 安藤元一	野生動物の分子遺伝学的解析技術、鳥類の繁殖に関する技術、内分泌学的手法、野生動物の野外調査法について演習を実施する。
人間動物関係学特論(二)	選択必修	2	大石孝雄	伴侶動物学の学問体系と特質について述べた後、伴侶動物学の動物学的側面、社会学的側面及び文化史的側面について解説する。特にイヌ、ネコの感覚能力、コミュニケーション法、盲導犬等の社会的貢献、動物福祉問題、人間との生活の歴史などについて授業を展開する。
人間動物関係学特論演習(二)	選択必修	2	大石孝雄	イヌ、ネコ等の伴侶動物の動物学的特性、ヒトとの共生における社会的問題、ヒトとの共生の歴史などについて、国内外の関連の文献を調査・購読し、その内容について教員・学生で討議する。
人間植物関係学特論(一)	選択必修	2	山口裕文** 廣瀬友二 宮本 太	人類は自然と共存する中で、文化と文明を発展させてきた過程で多くの自然を破壊し、生態系を劣化させて来た。これをふまえて、これからの人類の未来をどのように築いて行くのか、人間と植物の関係性に着目して人類に何ができるのかの講義をとおして意見を述べ検討する。
人間植物関係学特論演習(一)	選択必修	2	山口裕文** 廣瀬友二 宮本 太	自然環境と人間、植物共生、生物多様性、地域資源植物、野生生物、環境保護・保全の課題に沿って、各自論述課題を設定し、討議を進めると共にこれからの地球環境において植物の果たす役割は何かを考える。
人間植物関係学特論(二)	選択必修	2	山口裕文** 木村正典	植物と人間との関係の歴史的発展過程と現代に生かすべき植物とのかかわりがもつ福祉機能の知識とその利用のための理論を体系的に講述する。観賞植物、景観植物、雑草など自然景観植物、食用植物、香料香辛料植物、儀礼植物などを具体的な事例として、人々の生活と密接に関わる多様な植物のもつ癒しとやすらぎ、健康促進や生活の質の向上などを解説する。また、環境修復や保全と併せて安らぎや健康促進をはかるための植物との接触のありかたに関わる理論と手法を修得させる。
人間植物関係学特論演習(二)	選択必修	2	山口裕文** 木村正典	人間植物関係学特論(二)において展開した内容について、各自テーマを設定して文献を調査、内容について、背景、目的、研究手法、結果、考察等の点についてまとめ発表し、教員と受講生全員で討議する。
生物介在療法学特論(一)	選択必修	2	林 良博** 滝坂信一	動物介在療法学分野の体系的な専門理解を目的に人と動物との関係を整理し、教育・福祉・医療・心理の領域から動物を用いることについてもたらされる様々な特性について具体的な事例を挙げ、その歴史、特徴、方法および評価の理論そして課題と今後の展望について講義する。具体的には、動物介在療法とはどのような特色をもったクライアントへのかかわりなのかについて、<人間-動物>関係論、医療・福祉、臨床心理、教育の各分野から歴史的経緯、理論、諸課題の観点で扱う。
生物介在療法学特論演習(一)	選択必修	2	林 良博** 滝坂信一	動物介在療法のなかで理論構築と方法論の開発が進み国際的に普及している治療的乗馬において使用される<馬>をとりあげ、馬の特性・治療的乗馬の目的に応じた選択法・調教法・管理法について文献購読にあわせ実際の馬を扱うことを含めて検討する。さらに、日本在来種馬の特性と活用可能性について扱う。

* 非常勤講師(客員教授)

**新規採用者

授業科目	必/選	単位	担当教員	講義内容
生物介在療法学特論(二)	選択必修	2	浅野房世	人間と植物の関係を療法として活用した歴史は古い。なぜ人は、植物から癒しを受けられるのか？あるいはそれを療法として、活用するという行為は、何なのか？もっとも必要とされる植物介在療法のスキルとは何なのか？これらのことを踏まえながら、植物を療法的に用いることの人間学的意味や、どのような治療構造のもとにおこなわれるべきかを学ぶ。
生物介在療法学特論演習(二)	選択必修	2	浅野房世	植物介在療法を理解し、臨床に対応するため、医療施設での実地演習を行う。首都圏の医療施設を中心に、臨床として患者に植物介在療法のプログラムを提供する。患者へのアセスメント、療法の焦点化、プログラムの立案、実施、そして評価という一連の行為をおこなう。これらの臨床演習は、対象となる施設でのスーパーバイザー、医師などと、当校研究室担当教官との連携で指導を行う。
野生動物学詳論	選択	2	小川 博 安藤元一	野生動物はすべての家畜の祖先であること、野生動物がいかに人間生活を豊かにするために貢献しているか、野生動物の多様性を地球的視野で理解して保全することの重要性、さらに野生動物学における研究手法について講義を展開する。パイオセラピー学が対象とする野生動物学の範囲について概説の後、野生動物の多様性、資源としての野生動物の活用、野生動物の保全および野生動物の行動管理等について講義を展開する。
伴侶動物学詳論	選択	2	大石孝雄	人と共に生活する伴侶動物について、そのよりよき共生や活用を図ることは重要である。そこで本科目ではその基礎となる伴侶動物の遺伝的、行動・心理学、衛生管理学などの分野について、科学的検証に基づいた授業を実施する
動物介在療法学詳論	選択	2	林 良博** 滝坂信一	動物介在療法分野、特に治療的乗馬分野の概念構造、関係諸理論、適応に関するガイドライン等を紹介し分析する。わが国における医療、教育、心理、福祉、障害者スポーツ領域さらに社会の現状から動物とりわけ大型動物である馬を導入する場合の課題について述べる。
植物共生学詳論	選択	2	廣瀬友二 宮本 太	人類がこれから地球環境とどのように関わって行くかを再考するためには、自然環境を的確に読み取り、その結果に基づき保護・保全を考え、利用を進めて行かなければならない。そのためには、自然環境における植物の実態や役割を理解するための基礎的知識を養う必要がある。一方、自然環境を利用するにあたっては、人と自然環境を考慮した植物生産を理解し、植物資源を有効適正に利用する必要がある。本講義では、地球環境を保護、保全および利用するための知識と方法論について展開する。
人間植物関係学詳論	選択	2	山口裕文** 木村正典	人間の身近な暮らしのなかにある観賞植物、景観植物、雑草など自然景観植物、食用植物、香料香辛料植物、儀礼植物などが、具体的にどのような形で人間とかわり、どのような影響をもたらしているか、それが生きることにどのような意義をもつか、暮らしのなかで福祉を増進し、かつ地球の健康をはかるうえでどのように活用すればよいか、を具体的な植物を取り上げながら詳述し、探り、かつ検討する。
植物介在療法学詳論	選択	2	浅野房世	植物介在療法とは、単に患者が植物を育てる行為を呼ぶのではなく、患者が生きようとする姿勢を確保、もしくは維持するために、植物のあらゆる形態を活用することである。したがって、精神疾患・心理的障害、疾病を受容できない患者など、あらゆる患者が対象になるといっても過言ではない。 本講義では、とくにその対象として幼児・児童をあげ、発達心理をふまえ、被虐待や発達障害のある対象者への具体的な植物介在療法とその評価手法を学ぶ。

**新規採用者

授業科目	必/選	単位	担当教員	講義内容
生物介在療法特別実習(一)	選択	2	林 良博** 滝坂信一 浅野房世	動植物を介在した療法を実践するための技術を修得するため、動物系と植物系の実習を行う。動物介在療法では 障害者施設、高齢者施設、教育施設等において利用者のニーズと状態像のアセスメントを行い、各施設および利用者の特性に適した動物種を介在させた支援プログラムを作成し、成果報告を行う。植物介在療法では、園芸療法士としての職能を習得するための実習として、認知症高齢者、精神疾患、脳梗塞、障害児を対象として、各施設に出向きプログラムを実施する。医療施設とはなにか、医療の連携によるケアの方法、既存職能(作業療法、理学療法)
生物介在療法特別実習(二)	選択	2	浅野房世 林 良博** 滝坂信一	動植物を介在した療法を実践するための技術を修得するため、動物系と植物系の実習を行う。植物介在療法では、園芸療法士としての職能を習得するための実習が必要となる。患者を知り、その患者に合う植物と、その植物とどのような関係を持つかが、最も必要とされるスキルを体得する。各障害別の焦点化、プログラム立案、実施、評価の一連の流れを経験する。動物介在療法では障害者施設、高齢者施設、教育施設等において行った利用者のニーズと状態像のアセスメントに基づき、各施設および利用者の実態に応じてつくられた動物を介在させた支援プログラム
プレゼンテーション(一)	選択	2	小川 博 大石孝雄 林 良博** 山口裕文** 浅野房世	修士論文研究あるいは関連する研究成果から公表する内容を選択し、その発表の場にふさわしい学会を選び、学会への申し込み、学会の規定に則り必要により要旨を作成、プレゼンテーションの準備を行い、実際に発表を行う。発表までのプロセスや内容、指導内容と指導に対する対応等を月報にまとめる。学会の発表については講演要旨、大会プログラムと質疑内容等の報告書を提出する
プレゼンテーション(二)	選択	2		修士論文研究あるいは関連する研究成果から公表する内容を選択し、その発表の場にふさわしい学会を選び、学会への申し込み、学会の規定に則り必要により要旨を作成、プレゼンテーションの準備を行い、実際に発表を行う。発表までのプロセスや内容、指導内容と指導に対する対応等を月報にまとめる。学会の発表については講演要旨、大会プログラムと質疑内容等の報告書を提出する
論文作成法	選択	2		研究成果を論文文化し、学術誌(和文)に投稿する。論文執筆、投稿雑誌の選択、投稿、編集者や論文の審査員とのやりとりを経て学術誌に掲載されるまでの過程を経験することにより、研究者として必要な成果の公表方法について学ぶ。
英語論文作成法	選択	2		研究成果を論文文化し、学術誌(英文)に投稿する。論文執筆、投稿雑誌の選択、投稿、編集者や論文の審査員とのやりとりを経て学術誌に掲載されるまでの過程を経験することにより、研究者として必要な成果の公表方法について学ぶ。
特別講義	選択	1		バイオセラピー学や農学系の専門領域あるいはそれらの学際的領域である学会、各種シンポジウム、ワークショップ、セミナー、研究集会、講演会等に参加し、内容についてまとめ、関連する文献調査を行い考察レポートを提出することにより、専門領域における最新の研究の動向、話題、問題点等の知識を得る
総合実践演習	選択	1		バイオセラピー学科で開講されている講義、実験・実習・演習等について、課題の設定、教材の準備、講義等について教員の指導の下、授業に補助的に参加し、その内容についてレポートを作成、改善点等について教員と討議させることにより、教育者あるいは指導者としての資質を養う。
インターンシップ	選択	2		生き物との共生、動植物による生活の質の向上や癒しに関する活動、仕事、研究等を実践体験し、バイオセラピー学に関わる高度な職業人としての意識を涵養する。プログラムは専攻研究室ごとに設定し、行政および企業等からの公募インターンシップについても各研究室で対応する。実習は、自然保護に関わる施設、団体、研究機関および企業、動植物園や博物館、農業・園芸、植物関連機関および企業、動物病院や動物飼育機関およびペットショップ、都市公園、教育、福祉、医療、馬事施設等で行う。

**新規採用者

授業科目	必/選	単位	担当教員	講義内容
知的財産管理法	選択	2	吉永 貴大	<p>これまで知的財産権とは無縁だった業界でも特許や商標の関心が高まり、特許権侵害や商標権侵害などの警告状が飛び交う時代になった。また、日本発の技術やブランドの価値が見直され、世界で日本の技術やブランドを保護するために、知的財産権による保護・活用の必要性が以前より高まってきている。</p> <p>そこで、知的財産権制度の基礎的知識と応用力を習得することを目的として、現役の弁理士が実務に即した講義を行う。</p>
バイオセラピー学特別実験・実習・演習	必修	10	小川 博 大石孝雄 林 良博** 山口裕文** 浅野房世	<p>与えられた課題について、解決の手順、方法等を考案、手法を習得し、調査・研究を行って得られた結果を基に論文を作成することにより、論理的な思考能力、研究能力および問題解決能力等を養う。</p>

**新規採用予定者